
剣と魔法と《學園》モノ。

猫村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と魔法と《學園》モノ。

【Nコード】

N2307U

【作者名】

猫村

【あらすじ】

神のミスで魂の輪から外れてしまった主人公、御薙^{みなぎ} 輝弥^{かくや}は異世界に、しかも女性として転生する。神によって与えられた能力を使い少女は世界を護るべく戦いの渦中に身を投じる。

強さとは何か？ 守るべきものとは何か？ 後の世において《蒼天の騎士》《戦場の舞踏姫》と呼ばれた誰より強く優しい少女の物語が今始まる。

*注・この小説は小説投稿サイト『Arcadia』様にも掲載させていただきます。

第1話 Dangerous girls

欲しいものはそんなに多くない——人生の加速。自分の一生を全力で駆け抜けている実感。

ただそれだけがあれば、他に何もいらなかった。

*

闇と血と狂気を封じ込めた、暗くただひたすらに昏い石の空間に四人の男女が対峙していた。

いや。年の頃なら一七・八の彼らは『男女』というよりはむしろ、『少年・少女』という方が正しいのか。

一人は気怠げな空気をまとった少年。

あまり手入れをされているようには思えない、天然のパーマが入った髪と、砂漠の砂のように乾いた瞳。服装は学生服と思しい、黒を基調に赤のラインが入ったもの。口元には喫煙具だろうか、なにかパイプのようなものを咥えている。

一人は快活そうな少女。

焦げ茶色の髪を両サイドでくくり、目元になきぼくろ。なぜかデニムジャケットを構えている。

彼らをかばう位置で、さらにもう一人の少年。

やや長めの黒髪の少年。先の気怠げな少年と同じデザインの服の

上から拳銃や予備マガジンの詰まったタクティカルベストを着込み、肩からスリングでサブマシンガンを引っ掛けている。身長はやや低め。穏やかで“のんき”そうな童顔。額に暗視装置のようないかいバイザー。

容姿そのものはさして人目をひく風貌ふうぼうではない。だがその目、その瞳の奥底に秘められた《光》。それは、まるで夜空の星のような輝きを放っていた。闇が濃ければ濃いほどに、夜が深ければ深いほどに燦然と光を放ち、道に迷う誰かのことを優しく照らして力づけてくれるような——そんな輝きを。

そして、彼らと相對する最後の一人。

まるで拘束具のような装束を身に付けた少年。並外れた長身、病的に白い肌と異様に長い両腕という《彼》の姿はその衣装も相まって、いつそ《異形》といっても差支えない。

——なによりもその身に纏う雰囲気は、彼が《ヒトならざる魔人》であることを言外に告げていた。

少年達がなにがしかの“やりとり”を行う。

少女が《異形》の少年に何かを訴える。だが必死の面持ちで語りかける少女の言葉も《彼》には届かない。

「もう戻れないんだよ。もう戻れないんだ……。風がどんな音を立ててそよいでいたか——水がどんな音を立ててせせらいでいたのか。——今の僕には、もうなんの旋律も聞こえない。全てあの日に失ってしまった」

静かな独白が闇の中に反響した。

喜びも怒りも哀しみ楽しみも、何もかもを、世界に満ちる色を失った声。何の感情も込められず淡々と紡がれる少年の言葉は、なま

じな慟哭くいきよりも雄弁に彼を蝕む絶望の深さを物語った。

彼が抱える闇を垣間見て、乾いた瞳の少年がわずかに眉を寄せ、少女は立ちすくむ。誰もが指の一つも動かせないその静寂。静止した暗闇の中、

「――」

バイザーの少年が何かを言いながら一歩、前に出る。声こそまったく聞き取れないものの、その表情から真摯なものが見て取れることから、おそらく《異形》の少年を説得しているのだろう。

「――、――」

「・・・君が僕を助けるだって？ 出来もしないことを、よくもぬけぬけと口にする。それとも、そうやって口先だけで人を誑かすのが君の処世術かい？」

《異形》の少年が心底輕蔑したように言った。

それは違う。少年は出来ると確信しているからこそ《異形》の少年を助けようとしているのだ。

――いや、それも違うか。

彼にとつては『出来る、出来ない』なんて、きつと瑣末さまつな問題なのだ。『やるか、やらないか』、それだけが彼の行動原理。

一度『やる』と決めたのなら、それがどれほどの困難を伴おうともやり遂げる。その意思こそが彼の強さの源。そんな彼だからこそ、彼の言葉に、行動に、誰も彼もが救いを見いだすのだ。

だって彼は――

「出来るさ。だって俺は——《宝探し屋》なんだからな」

少年の短い一言だけが、やけにクリアに聞こえてきた。

《宝探し屋》——その一言にどれだけのものが含まれているのだろう。少年は確かな自信と、それ以上の誇りを感じさせる声で噛みしめるように言った。

そんな彼の姿に毒気を抜かれたのか、あるいはこれ以上は話すだけ無駄と考えたのか《異形》が会話を打ち切り、同時に彼の全身から殺気が迸る。

「・・・無駄話は終わりだよ。ここが君達の墓場になる。安らかに眠るがいい——」

対する少年はかすかに渋い顔を見せた。だがそれも一瞬のこと。

口の端を不敵なかたちに吊り上げる。

笑ったのだ。この少年は。

常人ならば充て^あられただけで気死に至るであろう殺意を受けながら尚、闇の中に蠢く魔人と彼らを蝕む絶望を笑い飛ばしたのだ。

転瞬、少年は今までの飄々とした風情からは想像もつかない、まさしく電光の速さで手を閃かせ、サブマシンガンを右手に、タクトイカルベストから抜いた拳銃を左手にそれぞれ構える。

不敵な微笑みと共に武器を構えるその姿は、さながら春の訪れを告げる強く優しい風のようにであり、全てを吹き飛ばす無慈悲な嵐のようでもあった。

《異形》の少年も、腰をわずかに落とし両腕を突き出すようにした構えを取る。

それが戦いの合図。

少年は両手の銃を強く握りしめ、走りだす。

この闇の淵に蠢くなにもかもを打ち砕くべく、少年はただまっす
ぐに駆け――

・・・・・・・・

*

そこで目が覚めた。

(・・・あー？)

いまだ寝ばけ気味の目に映るのは、つい先程まで『視て』いた闇
が満ちた石の空間などではなく、十数年の間私の面倒をみてくれた
自室の天井。カーテン越しに憤ましかに朝を告げるお天道様の光、
名も知れぬ小鳥のさえずりが、夢から覚めたことを知らせてくれる。

ベッドに横たわったまま首だけを動かして、周りに目を配る。

小説やコミック、教科書やらが詰め込まれた書棚、好きな映画の
フィギュアやプラモの飾り棚。コーヒー豆やドリッパーが並べられ
たローテーブル、一緒に置いてあるサイフォンのコーヒーメーカー
は実家が営むリストランテの手伝いのバイト代で買った《宝物》。
机と椅子、クローゼット、何枚かの音楽や映像のディスクが散らば
る床。シングルのベッド、シーツ、毛布――もうちょっと寝てい
たい。

目の中に飛び込んでくる部屋の中のインテリアを“ぼんやり”眺

めながら、私は眠りから覚めたことを知りぶーたれました。

（あーあ。『あの夢』を見るのも久しぶりだったのに・・・それが、一番イイところで目が覚めるだなんて・・・）

『ツイてないなあ』とぼやきをひとつ、アクビもひとつ。目を“こしこし”とこする。次いで、ベッドから上体を起こ・・・そうとして硬直。左の腕に違和感———というか重い。何か『スベスベして柔らかいもの』が巻きついていてる。コレは・・・

その感触に、さっきまでの眠気がアポロ13よろしく空の果てまで吹っ飛んでいく。

ベッドの毛布を“おそろおそろ”ひつpegし・・・そこにある『スベスベして柔らかいもの』の正体を確認。嘆息、諦観、ついでに頭痛。OH・・・天にましますジーザスだか釈尊だかつてご尊名のスーパースターよ、我を救い給え。

首のみ曲げて天（井）を仰ぐ私の傍ら、そこにはヒトの気も知らず“すうすう”と、安らいだ寝息を立てる少女の姿がありました。

ガラス細工のように繊細な美貌を彩るのは、朝日に照らされアメジストのような輝きを放ってベッドに流れるスミレ色のロングヘア——と、透き通るように白くて肌理のこまやかな肌。そして一見しただけで私達『ヒューマン』とは進化系統樹からして違うと知らせる、尖った耳と・・・側頭部から額のあたりまで伸びる角。

『ディアボロス』———冥界の血を引くと言われる種族の少女。それが私の左腕にしがみつくようにして眠っている・・・しかもスケスケのベビードール姿で。状況だけなら私とこの少女が“ただならぬ”関係のようにも取れるのですが・・・実際のところはそれに輪をかけてややこしい関係だったりするのが泣けてくる。

この少女、名前はミイネ。

今から7・8年くらい前に、実のご両親に先立たれたのをキツカケに、今の——私の両親に引き取られてきた、いわゆる義理の妹なのです。といっても、彼女より私のほうが数カ月ばかり早く生まれたというだけで、実際は同じ年なのですがね。

さて・・・その妹が、なんだって私のベッドに潜り込んでいるのかはこの際、脇に置いてくとして、

「んう・・・」

毛布をひつpegがされて寒いのか、少女——ミイネは艶っぽい響きの寝言と共に身じろぎ。温もりを求めて私の腕といわず身体に密着してくる。

やや細身ながら、それでもこの歳の女の子に特有の形容しがたいほどに柔らかく、それでいて引き締まった身体とシルクよりも滑らかな肌。その感触が私の脳みそに、全盛期のカール・ゴツチが放つスープレックス級の衝撃をはしらせました。

・・・イヤ、『はしらせました』じゃねーやな。まずは落ち着かんなとな、私。

とにかくコイツを起こさにやらん。煩惱多き自分に喝を入れつつミイネを引き剥がし、今度こそベッドから体を起こす。すると、

「・・・チッ。ちゃんとタマついてんのかよ、このふにやチン兄め」

・・・。。。。。

聞こえてくる舌打ちと、毒に満ち満ちた声の発生源は言うまでもなし。私は傍らで寝こける（フリをする）少女に半眼の視線を送り

ました。

ねえお嬢さんや、アンタもう目え覚ましてんでしょ。なら、とつと私のベッド・・・てかお部屋から出てきなさいな。

「すやすや、そんなコトはないんだよ。ミネちゃんはまだ“おねむ”なんだよ。お兄ちゃんの濃厚な“ちゅー”がないと起きられないんだよ。だからさっさと、キスするとか下着の中に手え突っ込むとかしてよ」

バレバレの寝たフリすんなやアホ妹。てか、最後なんか発音はつきりとしてたじゃねーか。

「・・・それはお兄ちゃんの勘違いだよ。そんなコトより早くエロいことの一つや二つしろっつーの、こんの甲斐性なしのクサレ兄」

しつこく狸寝入り（もはやその体裁さえ整えとらん）を続けるミネに、私は思いつきり顔をしかめました。

誰がするか。ちゅうか、アンタは私を何に仕立て上げたいんだよ・

・

「・・・寝てる妹にいやらしい事をしてくれる、立派な兄になってほしいかな」

“むくり”と、上体を起こしながらミネは言い放ちました。タダの変態じゃねーか、ソレ。

「むー・・・何言ってるのさ、『兄たるものは妹に夜這いをかけるべし』——常識でしょ」

お兄ちゃんとしてはそんな常識がまかりとおる世界なんて、『デーパーインパクト』みたいに滅びればイイと思うんだ。

「だが残念。南極に作られたでかいロケットエンジンで隕石をやり過ごし、妹と兄がらぶらぶちゅっちゅなエンディングでした。めで

たしめでたし」

ハリウッドの超大作が、こともあろうに『妖星ゴラス』みたいなオチで終わんのかよ。二重三重の意味で泣けてくるな・・・

偏頭痛を覚える兄の“しかめつつら”なぞどこ吹く風。ミイネは「んー・・・」と、背を大きく反らして伸び。その身にまとう朝日が、まるで宝石のような煌めきで彼女を彩る。そんな何気ない妹の拳動に、不覚にもさっきまでの苛立ちさえ忘れ目を奪われてしまう。

（こうしてると・・・この娘ってやっぱり綺麗だよね・・・）

やましい意味ではなく、ただ素直にそう思う。

陽光に煌いて神秘的なものさえ漂わせる美貌といい、しなやかで繊細な肢体といい、宝石細工がヒトの形をまとったなら、きつとこんな女の子になるに違いない。半ば呆けた頭でスコン丸出しな感想を抱いていると、視線に気付いたミイネが首を傾げて訪ねてきました。

「お兄ちゃん、どうしたのぼーとしちゃって。寝不足？」

あ・・・うつん、なんでもないですよ。気にしないで。

「ふうつん？　なら、いいけどさ。それよりも・・・ねえ」

ミイネは思わせぶりに言葉を切り、私に艶めかしい表情を向けてきました。四つん這いになり、いたずら好きの仔猫のような仕草で私へとにじり寄る。

「さっきから待ってるんだけど——いつになったら『おはようのキス』をしてくれるの？」

・・・シねーですよ、そんなん。

細い顎を“くい”と上げて、夢見るような面持ちでキスの催促をする少女から、私は視線を顔ごと“ぷい”と外してできるだけ素っ気無く応えました。

顔を背けたのは、おそらくトマトより真っ赤に染まっているであろう自分の顔色を悟られないため。なにより、彼女の魔力じみた魅力から逃れるため。心臓はいまだに早鐘を打ち鳴らし、静まりそうにない。

（この子、ひょっとしたらサキュバスの血でも引いてるんじゃないかなろうか）そんな馬鹿なことまで考える兄の様子をどう捉えたのか、ミネが「くす」と、小さく笑いました。

「まったく、いつまで経ってもウブというか煮え切らないんだから。いいじゃん、今さらキスくらい」

うつせ。それより、いつまでもヒトのベッド占領してないで、さっさと自分の部屋行つて着替えとか済ませちゃいなよ。

「えー、やだー。もっとイチヤイチヤしようよー」

ミネは頬を「ぷう」と膨らませて駄々をこねました。そんな姿さえ可愛らしい妹に苦笑いしながら、私は（この子も変わったもんだな）と、少し懐かしい気持ちで昔を思い出しました。

信じられますか。この子、それでも昔は物凄い人見知りで、ウチに来たばかりの頃なんて家族にだって滅多に口を開かないほどだったんですよ？ ソレが今では・・・

「『それが今では、ところ構わず股を開くビッチになっちまうとはなあ』と、笑いつつお兄ちゃんはわたしのショーツの中に手を入れてきました。サカリのついた獣を思わせる下卑た笑いと共におこなわれる激しい愛撫。わたしは為す術も無く絶頂を強制され——」

ドサクサに紛れておかしなモノローグをいれんな。つか、私は団だん鬼六おにろくや千草忠夫ちくさただおの小説に出てくるヒビジイか？

「・・・前から思ってたんだけど、どうしてお兄ちゃんってそういうオッサンくさい喩たとえをするのよ。団塊世代のセンスじゃん、それ」ほっとけ。それよりも、さっきも言っただけ早く朝の準備とか済ませちゃいなさいよ。忘れちゃってるかもしれないけど、今日は――

――
「大事な新入学式、でしょ。わかってますよーだ」

ミネは私に“ベー”と舌を出してベッドから降りました。そしてスリッパを履こうとしたところで「・・・うん？」と、窓の外、より正確には一階の玄関がある方（ちなみに私とミネのお部屋があるのは二階）へ胡乱げな視線を送りました。どうかしたんですか、ミネ。

「んー、なんでもないよ」

こちらを見ずに“ひらひら”と手のみを振って応えるミネを少しばかり訝しく思いはしたものの、私は『まあ、いいか』とほっとくことにしました。私も早く着替えとか済ませないといけないし。アクビを噛み殺しながら私もベッドから降り、脇に置かれたスリッパに足を通す。すると「・・・ねえ、お兄ちゃん」という声と共に、いつの間にか私の前に立っていたミネの両手が”しゅるり”と私の肩に置かれました。

――へ、何？

反射的に仰け反る私。その動きに合わせ、ミネが「えいや」と、体を私に預けるようにして抱きつき、もつれあうようにして二人、ベッドに転がる。

ちよいと、なにすんのさ。兄の体に馬乗りの形でまたがる妹に私は抗議の声を上げました。

「んー？ ナニと聞かれてもねえ、強いて言うなら・・・ちよつとムラムラした気分になっちゃったから、押し倒してみました——てとこかな？」

なっっちゃったじゃねえですよ、あほちん。どこの世界に気分で兄を押し倒す妹がおるんじゃ。

「今この場に、お兄ちゃんの目の前にいるじゃん」

ああ、まったくもってその通りだわ。

苦い顔する兄のことなぞ知った事ではないとばかりに、ミネは小悪魔じみた微笑みで私の胸元に手を這わせ、舌なめずりさえしてゆつくりと顔を寄せてきました。私はこちとらの唇を奪わんとするミネを全力でひっぺがそうとするも・・・さすがディアボロス、ビクともしねえし！

「んっふふー」 こうしてると、まるでわたしがお兄ちゃんを襲ってるみたいだね。何だか興奮しちゃうなあ」

『まるで』じゃねえし、『みたい』でもねえし。まんまアンタが襲ってんだよ！　つか、放せえー！　なにが悲しゅうて人生の節目を迎える日に、妹に寝起き襲われにやあかんのじゃあ！

「うわー、いいねいいねその表情。キタコレマジヤバイどうしようお兄ちゃん、わたし・・・キスだけじゃ我慢出来ないかも」

そう言つて熱い息を吐き、ミネは熱に浮かされたような表情で私に体、というか下半身を押しかけてくる。そしてひとしきり“もぞもぞ”と身体を揺すると、不意に何かに気付いたような顔をしました。“ニヤリ”と、悪魔のように笑う。ディアボロスだけに。

「なーんだ、お兄ちゃんもやる気満々じゃない。ここ、ガツチガチだもんね」

男の子は朝みんなそうなんの！ ああもう、ヘンな動きをするんじゃないやしませんよ、はしたない。

「えへへ、そういうのを『上の口ではイヤがっても下の口は正直』っていうんでしょ。知ってるんだよ、わたし」

私にや『下の口』なんざねえよ、あほう！ いいから早よどかない！！

「はいはい。言われなくてもそうしますよーだ、いくじなし。正確にはあと・・・10秒くらいしたらね」

・・・ハイ？

おかしい事を言うミイネに、私はどういう事よ？ と聞き返しました。ミイネは答えず、「9・・・8・・・7」とカウントダウンをとる。一体なんだっちゅうねん。

状況にまったくついていけない私を置いてけぼりに、カウントダウンは進行していく。「3・・・2・・・1」そこまで数えたところでミイネが部屋のドアへ、親の仇でも見るような目を向ける。そして――

「ゼロ」。陰気な口調で“ぼそり”と呟いたその時、

「おいリツカ、オマエいつまで寝てんだよ！ さっさと起きねえと入学式に遅刻しちまうぞ！」

という、朝っぱらから随分元気な声と共にドアが乱暴に開けられました。

・・・なるほどね。さっきの窓の外に向けた視線は“コイツ”が

原因か。私はこれから起こるであろう厄介事に顔をしかめずにはいられませんでした。

人の部屋をノックもせずに開けたのは、全身から眩いばかりの活力が溢れ出ているかのような女の子。

腰まである鮮やかな青髪はポニーテールでまとめられ、切れ長の目はツリ目気味。瞳の色は目が覚めるようなパープルアイ。背はかなり、私よりも頭一つ分くらい高いうえに、服の上からでも判るくらい鍛えられた身体のおかげで実際の身長以上に大きく見える。

服装は今日から私達が通うことになる、『クロスティーニ学園』の制服。白地をベースにして、袖や胸元にオレンジのラインが引かれたポップなデザインのそれは、よく見れば通気や保温をはじめとした様々な機能性を持たされている。

なにより目を引くのが・・・背中から生えた青い鱗に覆われた翼竜のような翼と、引き締まったヒップから伸びるやはり青い鱗が覆う尻尾——それらはすなわち『バハムーン』という、竜属の因子をその血脈に宿らせる種族の出身であるという証左でもある。

彼女の名前はハル。

私の幼馴染・・・というだけで片付けるには済まない、ちよいとややこしい関係にある少女。

「・・・・・・・・」

そんな彼女はドアを開けた格好のままで私達の姿——妹に押し倒される兄の図——を石化の呪いでもかけられたかのように硬直して見続けている。さっきまでの快活な様子など跡形もない無表情でこちらへ視線を送ってくる彼女に、私は顔を引きつらせました。

（うわやバイ。絶対勘違いされてるよ、これ）

とはいえ、黙っているばかりでは事態は解決しない。誤解を解くため私は口を開きました。

あ・・・あのね、ハル。勘違いしないでほしいんですけど、これはミイネが私にじゃれついてるだけなんです。よくある兄妹同士の微笑ましいスキンシップ。決してやましい事をしてたのでは――

「ストップ」私の言い訳をハルは苦り切った顔で遮りました。次いで、いまだ私に馬乗り状態のミイネへとそれはそれは冷たい――ぶつちゃけ、ヒトというより生ゴミでも見るような視線を送りました。

「・・・まー、ナンだ。言いてえ事は山のようにあるんだがよ、何を言ったらいいかわかんね。だから、とりあえず――」

言いながら、ハルはドアノブを掴んだままの左手に力を込める。ドアの蝶番が“ぎちり”と、耳障りな悲鳴を上げる。って・・・ちよつと！？

「――死ねよ、オマエ」

平坦な口調の死刑宣告と共にハルはドアを軽々と引っこ抜き、ミイネに向かってぶん投げる。直撃すればいかなディアボロスとてタダでは済まない威力のそれをミイネは「フン」と鼻で笑い、右の裏拳でもって粉碎――見た目華奢なその細腕に一体どれほどの力が込められたものか、哀れドアは文字通りの“粉微塵”に。つーか、なにしてくれてんだよ、ハル！

舞い散る破片を鬱陶しそうに払い除け、ミネは“ゆらり”とベツドから立ち上がり、スリッパも履かずにハルの方へ足を運ぶ。それに呼応するようにハルもミネとの距離を詰める。ミネが“ひたひた”と、柳の下の幽霊のような足取りなのに対し、ハルのそれは虎やライオンを連想させる堂々たるもの。

そして私はといえば、二人の雰囲気^{まなじり}に飲まれ指一つ動かせないでいる。・・・情けないと思うなかれ。だってコイツらは片やディアボロス、片やバハムーン。なんぼ見てくれが美少女でも中身はメル・ギブソンやジェット・リーも裸足で逃げ出すリーサル・ウェポン。そんな奴らの間に割って入る度胸なんざ私にや無いですよ。

事の成り行きをハラハラと見守る私をよそに、二人は部屋の真ん中でまるでタイトルマッチのボクサーのように睨み合う。といっても、ミネの身長は私よりもやや低いので、ハルが上から見下ろすような形ですが。

そうしてしばらくの間、見ているこちらの方が胃袋をやられそうなガンつけ合戦の後、ミネが口を開きました。

「・・・ちよつと、いきなり何すんのよ。危ないじゃない」

「そりゃそーだ。殺す気でヤツたんだから危ねえのなんざ当たり前だろが。つーか避けたりすんな。キツチリ当たって死ねや泥棒猫」

「ハア？ 全然ナニソレ意味分かんない。死ぬべきはむしろ、ヒトが兄妹水入らずで仲良くヤツてるところに呼ばれもしないのに乱入して暴れだすマジ基地トカゲ女の方じゃん。ていうか、いいかげん爬虫類の分際^{まなじり}でヒトの兄に手え出そうとかやめてくんない。トカゲはトカゲらしく『ジュラシク・パーク』でもオカズにしなからオナツてりやいいじゃん」

「——ンだと、テメエ！」

あまりの暴言にハルは眦^{まなじり}を吊り上げ、ミネの首に右手をかける。

大きめのコインすら余裕でひん曲げるバハムーンの握力をもつてすれば、ミィネの首を枯れ木のようにへし折ることだって造作も無い。絶体絶命と言ってもいいこの状況。しかしミィネは少しも動じず、首にかけられた手にそつと自分の手を置く。次の瞬間ハルの顔が強ばり、その手が弾かれたように離れる。

「ふん。格上相手に手を出そうとするからそんな目に遭うのよ、ド低能」

口の端だけを“ぎりり”と吊り上げ、歪んだ笑みを浮かべるミィネ。

彼女が何をしたのかはすぐに判った。よく見ればハルの手の甲、その中心が真っ白に変色している。おそらくは、先の一瞬で右手の点穴——要するに“ツボ”みたいなモン——を突き、関節を外したのでしょう。その一瞬の早業に、私は舌を巻きました。やろうと思えば私も同じことができますが、しかしあの一瞬で、しかも実戦で行うなんてのはほぼ不可能。それだけに、ミィネの実力が“ひしひし”と感じられる。

ハルは右手を無理矢理に握って関節を強引に戻し、満面にあるっただけの憎悪を浮かばせました。うあ・・・ヤバイ、あのバカ本気になりやがった。

「・・・このアマ、もう許さねえ！ 手足ブツちぎって『イモムシ』にしてやる。で、身動きとれなくしたテメーの目の前でリツカを犯してやらあ！ 悔し涙で溺れ死ね！！」

「・・・へえー、そりゃあいい考えね。ステキなアイデアをありがとう。お礼にアンタを『猟奇刑事マルサイ』の“ダルマ女”みたくして、わたしとお兄ちゃんが愛し合ってるトコを見物させたげるわ！」

おまいら、朝っぱらからなんちゅう会話しとんじゃあ！ てか、
ヒトの部屋でケンカすんなあ！！

年頃の少女にあるまじき会話の応酬に、私は頭を掻きむしって怒声を上げました。しかしアドレナリンが骨の髄まで行き渡った少女達には届きやせん。二人は同時に後方に飛び退き3メートルほどの間合いを取り、構えを取りました。

ミイネは軽く曲げた左腕を前に、右手を腰のあたりに置く半身の構え。腰はやや落とし気味、足は爪先を少し浮かせての猫足立ち。

ハルは肩幅よりやや広めに開いた両足を少し曲げて、左腕で体中心と心臓、右腕で腹部を守るというレスリングとボクシングの間のような構え。

二人はファイティングポーズをとり、互いの隙をうかがう。

だからヤメロっちゅーとろーが！ 耳ついてねーのか、チサマら！！

意に反し、私の悲鳴じみた声が火蓋を切った。

先に仕掛けたのはミイネ。“くいっ”と、わずかに腰を落とすや激烈な踏み込みでもって一気に距離を詰め、突き刺すようなモーシヨンのローキック——膝関節狙いの前蹴りを放つ。

金属バットすら軽くブチ折る前蹴りを、ハルは足を軽く上げ脛の部分を手く使って防御。ミイネは素早く足を戻し、ジャブとフックの連打で不発に終わった蹴りの隙をフォロー。ハルは冷静にそれらをさばいていく。

数度かの攻防の後、ミイネの攻撃に僅かなほころびが生じ、ハルが攻撃に転じました。

攻守交替。左右のワン・ツー、コンパクトな肘、下段蹴りのコン

ビネーションでミイネの気を散らせ、出来た一瞬の隙に乗じた右ストリートをねじり込む。恵まれた体格とバハムーンならではの規格外の筋力、それらによって打ち出される一撃は大口徑ライフル弾並の威力を誇る。

「くたばりやがれ、性根腐れのクソ悪魔アツ！！！」
「死ぬのはアンタの方よ、この色ボケ爬虫類！！！」

打ち込まれたハルの拳を、手を絡みつかせるような防御で受け流し、ミイネはそのまま素早く懷に潜り込み腰を落とす。お互いの身体を密着させて攻撃を封じつつ、掴んだ腕を関節極めながら下に引っ張り、同時に腰を跳ね上げて一気にぶん投げる——あれは父の故郷に伝わる格闘技、『ジュード』の投げ技。名前の由来はよくわかんないけど、なんか強そうな響きだよなジュード。

関節を極められているので、ハルは動きに逆らわずあえて投げられる。首と体を丸め、きれいに受身を取ってダメージを軽減。それでも激突による衝撃で、床にクモの巣状のヒビが入る。

投げ飛ばした体勢からマウントを取るのかと思いきや、ミイネは掴んだままの右腕を更にねじり上げ、肘の関節目がけて右膝を打ち込む。……マジ容赦ねえな。

しかし膝が接触する寸前、ミイネは掴んだ手を離し後方に飛びすさりました。さすがにやり過ぎだと思ったのでしょうか？ 眉をひそめる私の疑問に、床に倒れたハルが答えてくれました。

「……ケツ、あのままチョーシくれて腕を折ってりや、替りにその貧相な首をヘシ折ってやったのになあ。つくづく生き汚ねえというか、ゴキブリ並みにしぶてえというか」

言われて気付いた。見ればハルの尻尾、いつもは邪魔にならないよう太ももに巻きつけてあるそれが、先程までミネの首があった空間で獲物を捉えそこねた蛇のようにのたうっている。なるほど、飛び退くのが一瞬でも遅れていたら、腕一本と引き換えにミネは首を持っていかれてたワケか。

後転倒立の要領で素早く起き上がるハルに、ミネが馬鹿にしたような顔をしました。

「フン。『肉を切らせて骨を断つ』ってヤツ？ 頭蓋骨の内側に、脳ミソの代わりにプロテインでも詰まってそうな筋肉馬鹿にしちやよく考えた方だけど、あんたのウジ虫だって食中毒起こしそうな腐れ肉とわたしの骨じゃ交換レートが吊り合わないわ。そうね、あんたが今までの詫びに腹でもかつさばいたら代わりに髪の毛一本くらいはくれてやってもいいかな」

「ぬかしてやがれよ、この野郎」

「そうね。これ以上アンタなんかと話してたら口が曲がっちゃいそうだもんね——とっとと決着をつけちゃおうか！」

そう言ってミネは再度の突撃、右のローキックを放つ。関節の柔軟さとスピードによって鞭のように“しなる”のが特徴の蹴りを、ハルはやはり脛でブロック。

しかし、それはどうやら捨て石としての攻撃だったらしく、ミネは間髪入れずにそこから足を跳ね上げ顎へのハイキック——段蹴——を繰り出す。

「ちっ！」

ハルは舌打ちと共にヘッドスリップ。獲物を仕留める蛇のように食らいついてきた二段蹴りをすんでのところでやり過ごす。続けて素早く腰を落とし、ハイキックが空振りに終わったことで隙だらけ

になったミイネにタツクルをかけようとする。

ミイネが会心の笑みを浮かべたのは、まさにその瞬間。

なんとミイネは空振った蹴り足をビデオのストップモーションのように“ぴたり”と静止させ、そこから巻き戻してもかけたかのような動きで踵落としを見舞いました。まるで生前のアンディ・フグバリの足技。よほどに優れたバランス感覚と、強靱な足腰がなければ出来ない芸当です。我が妹ながら、つくづくとんでもないな！

バトルアクスでも叩きつけられたような踵落としを、ハルはとつさに頭上でクロスさせた両腕でブロック。しかし、ガードを突き抜ける衝撃によって動きが止まってしまふ。

「甘いよ、ばあアかッ！」

ミイネは嘲笑を叩きつけ、軸足を“とん”と爪先だけで跳ねさせて軽やかにジャンプ。身体全体をコマのように回転させつつ右足を振り回す。まるでクラシックバレエのように優雅な動き。だが、そこから繰り出されるのはオークの首さえヘシ折るローリングソバット。無防備な胸元に足底をモロに食らい、ハルは大きく吹き飛ばされて壁に衝突。ぶつかった壁がハルの体の形にへこむ。

ついでに壁際の棚に飾ってあったジオラマ——『エイリアン2』のクライマックスシーン、リプリーinパワーローダーVSエイリアンクイーンの図。制作期間約2ヶ月ナリ——が巻き添えくらつて跡形もなく粉碎される。

うぎゃあ——！！　なんてことすんだよう！　アレって絶版になったプラモ使ってるから、もう二度と作れないんだぞ——！！

涙目になる私のことなぞ置いてけぼりに、彼女らの戦いはますます

すヒートアップ。勝負をかけるため、ミイネはまだまだにダメージが抜けきらないハルに肉薄、加速度込みの渾身の左――レバーブローをお見舞いする。

常人なら内臓破裂確定の一撃に宙に浮いたハルの身体へ、ミイネはさらに拳を戻す動作に連動した右膝を鳩尾にめり込ませる。

「――ぐガッ！」

プレートメール並の頑丈さを誇るバハムーンの腹筋も、あれだけの蹴り足が利いた膝の威力は殺せない。悲鳴を上げて仰け反るハルへサデイスティックな噛いを投げかけ、ミイネは上体を大きく反らせる。そして半秒ほどの『タメ』の後、まるで引き絞られた弓矢のような勢いで、胸元めがけてヘッドバットを打ち込む。

やり過ぎだ！　なに考えてんだよ、ミイネ！

私は悲鳴を上げました。先にも述べたようにミイネはディアボロス。その頭には側頭部から額の辺りまでを覆う『角』が生えている。それも結構鋭いのが。当然の事ながら、そんな奴が頭突きなんぞかましたら相手の体にはマルコビッチもびつくりの『穴』が空く。あんなモン突き刺さったら、どこに当たってもシャレにならん。殺す気がアンタ！

「ま　こみたいに、穴あいて“死ね”えええええ――！！！」

「――ッ！　ナメんじゃ、ねえッ！」

およそ妹の口から出てくるものとしては、最悪の部類に入るであろうセリフ（大体、アレって『姉』の台詞だし）と共に繰り出された頭突きを、ハルは突き出した左腕を盾にして防ぐ。直撃こそ防いだものの、角が腕に突き刺さり盛大に血がしぶく。あんな量の出血をしたら、握力の低下はまぬがれない。この状況では致命的と云っ

ていい。

ミイネも私と同じことを考えたらしく、口の端を歪める。だが、それも一瞬のこと。ミイネの顔から会心の笑みが消え、代わりにハルが歯を剥き出しにして晒う。・・・どういうことだ？

「・・・へへ、『捕まえた』ぜー。覚悟しろよ、コノ野郎・・・ッ
！！」

そう言つてハルは拳を“ぎゅうつ”と握りしめ、左腕に力を込める。それを見て、私は彼女が何をしているのかを理解しました。

なるほど、刺さった角を筋肉の収縮によって締め上げてミイネの動きを封じているのか。なんつー力技じゃ・・・

「~~~~ッ、この！ 放し、なさい、よ！」

歯を食いしばり角を引き抜こうとするミイネへ、ハルは歯を剥き出しにして“ぎらり”とした（そうとしか表現しようがない）凶暴な笑いを閃かせ、

「ああ、イイぜ——放してやんよ！！」左腕に更に力を込め角を完全に固定し、ミイネを強引に引き寄せる。それによってバランスを崩したミイネのお腹を鷲掴みにして軽々と持ち上げる。

そしてリフトと同時に左腕から角を抜き、さっきのお返しとばかりにオーバースローで壁にぶん投げました。

ミイネの華奢な身体は、タイニートウーンのキャラクターよろしく壁に人型の穴をあけてブチ破り、地上二階の高さから（大体5〜6メートル）庭に地面に放りだされ・・・って、えああああアアアア！ ミイネエえ——！？

数瞬の後、私の耳に何と言うか・・・あんまり想像したくないんだけど大体5〜6メートル程の高さから、私より少し軽いくらいの重さの何かが落っこちたような音と、『ふぎゃッ!』という声が聞こえてきた。

み、ミミ、ミイネえ・・・大丈夫ですかあ!?

妹の安否を確認するため、私はふらふらと立ち上がり、“こけつまろびつ”しながらやたらと風通しの良くなった部屋から庭に向かおうとしました。しかし、そんな私の肩をハルが引っ掴んでジャマをする。

ちなみに肩を掴んでいない方、マイシスターによって『穴ぼこ』が開けられた左腕からは“しゅうしゅう”と、音まで立てて白煙が立ち上っている。白煙の正体は、おそらく活性化した細胞の熱によって蒸発した体液。煙の下ではさっきの傷が、他の種族では真似できないほどの超回復をみせているのでしょうか。

それはさておき、なんだよ邪魔すんなと抗議する私へ、ハルは小馬鹿にするような顔を向けました。

「バーカ、心配なんざするだけ無駄だぜ。忘れたんかよ、ヤローは腐ってもディアボロスだぞ。あれくらいじゃアザか掠り傷くらいしかできねーよ」

そう言われて少しだけ冷静さを取り戻した私に、ハルが続けました。「大体、そうでなきゃ今までにアタシが百回はブツ殺してんだろーが」

まあ、確かにそうだけども。さっきから華奢な身体がどうか言

ってますが、その実ミネは私らヒューマンなんぞとは比較すんのもアホらしいほどの頑強な身体に生まれついる。どんだけ打ち所が悪かろうが、精々骨にヒビが入る程度でしょう。ディアボロスというのはそれほどハイスペックな身体の持ち主なのです。

とはいえ、それが妹を放つたらかしにしてよい理由にはならない。私はやっぱりミネの元に向かうべく部屋を出ようと思いました。が

「おーっと、逃がさねえぜ」

そう“うそぶき”、彼女は私の肩に置いた手に力を込めました。だから、なんなんだよさつきから。邪魔すんなと怪訝に思う暇もあつたればこそ。次の瞬間、私の身体は軽々と宙に放り投げられ――
「っおわあ!？ 何すんだよう!」

私の身体は放物線を描き、背中からベッドに『ぼふっ』と、音を立てて着地。そしてイキナリのことに頭が付いていかず混乱する私に、ハルが馬乗りになりました。

おい、何してんだ。どけっての!

怒声を上げる私には応えず、ハルは馬乗りのまま少し“むくれた”ような顔で私の唇を指でなぞる。

「オマエ、さ。もしかしてアイツと・・・キス・・・とか、してた・・・?」

『アイツ』というのはミネのことか。なんでコイツらは私の事をエロガツパに仕立てようとするかな。・・・身に覚えがない訳じゃないけどさ。

・・・してないっつーの。それがどうしたってんです。私がそう言うや、ハルは一転して笑顔になりました。うわ、なんか墓穴を掘

った気がする。

「そっか。・・・へへー、ならいいんだ。あのアマと間接キスなんざ御免こうむるからなア」

ちよ、まさか・・・“ぎよっ”となる私に、ハルが更に顔を近づけ——唇が、重なる。

突然のことに私は目を見開く。ハルも目を開いたまま。違いがあるとするなら、ハルがこの状況を楽しんでいるのに対し、私はひたすら目を白黒させるばかり。無様。

しかもキスだけでは飽き足らず、ハルは唾液でぬめる舌まで入れようとしてくる。

とっさに顔を背けようとするも、それより早くハルの手が私の顎を鷲掴み、そうやって無理やり開いた口内にハルは遠慮無く長い舌を潜り込ませる。侵入してきたハルの舌は、あっという間に私の舌を絡めとり、粘膜特有のぬめりと——なにより熱を伝えてきた。その感触にも流し込まれる唾液にさえも、嫌悪感なんてものは端から感じない。それが一層腹立たしい。

(・・・この野郎、もとい女郎、後で覚えとけ~~~~っ！)

心のなかでそう毒づくのが私にとっての精一杯の抵抗だった。

・・・

そうしてどれくらいの間が経ったのか。

口内を蹂躪し尽くして“ようやく”気が済んだらしいハルが、一旦離れた唇を私の耳元に寄せ囁く。興奮からか、やや掠れたような声だった。

「オマエ、相ツ変わらずキスがヘタクソだなー。ちつとは練習しとけよ」とことん余計なお世話だった。つか、練習なんてどうやってせえっちゅうんじゃ。「……唇もカッサカサだったし。リップケアくらいしようぜ、最低限の礼儀ってモンだろが」

うるっせーよ、あほう。私はできるだけ憎々しげに聞こえる声を絞り出しました。口にはいまだにハルの感触が残っていて、それが全然イヤじゃなくて……。おそらくハルもそれを見透かしているのがまたム力つく。畜生め。

……。もう気は済んだでしょう。さっさとどけっつーの。ミネのこと、確認しなきゃいけないんだから。

「ハア？ オマエって、マジモンのバカ。誰がこれだけで済むなんて言っただよ」

——へ？

呆氣にとられる私を無視して、ハルは上体をゆつくりと上げてジャケットを脱ぎ捨て、さらにその下の黒のハイネックのシャツを思い切りよく一気に胸元まで上げました。雪のように真っ白な肌と、六つに割れた腹筋から続く鉄板のような下腹部。更にスポーティなデザインのブラに包まれた、豊満なバストが私の目の前におしげもなく晒される。

ち、ちょ、ちょっと、なにやってんのさ！？

「なにつて、『ナニ』する準備に決まってるあな、言わせんなよ。」

——さ、今から二人でヤケドするくらいに熱いコトしようぜー」

ハルは“にかっ”と、満面に無邪気な笑顔を見せました。思い浮

かんだのは真夏の太陽。ミネのそれとは真逆、眩しいほどの健康美に溢れる彼女の笑顔はこんな状況であつてさえ、思わず見惚れしまうほどの魅力に満ちていました。でも流されるわけにはいかない。何とかしてこの場から逃れないと。ミネのことも気にかかるし。

しかし逃げ出そうにも、ただでさえ私よりも体格に勝る彼女にマウントをとられた上に、その両足が私の胸を“ガツチリ”固定しているのも思うままに動くことさえままならない。

・・・しかも今気づいたんだけど、彼女のヒップから伸びる尻尾がいつの間にやら私の寝間着のパンツを器用に剥ぎとり、下着の上から下半身をイヤラシイ動きでまさぐっている。ヤケドというより、もはや物理的に焼殺する企みでは！？　つか、放せーっ！！

“じったんばったん”と無様にもかく私を、ハルはさも楽しそうに見つけていました。

「へへっ、やーだよっ」　ココまできて誰が放すかってんだ。さーて新学期早々、一発キメとくか。・・・そーいや、こういうのも『姫初め』になるのか？」

全然ちげーよ！　ただの強姦じゃねーか！

「より正確には『強チン』ってんだけどなー。ま、どっちでもいいやな」

ハルは「イヒヒ」と、オッサンみたいなイヤラシ笑いで私の下着を剥がそうとする。

もはや観念するしかないこの状況。だがしかし、天は我を見捨てたか・・・と『八甲田山死の彷徨』みたいなセリフを吐くのはまだ早い。なぜなら――

「やめんか、この万年発情爬虫類」

その声と共に、いつの間にやら部屋に侵入していた何者かが、ハルの側頭部に飛び後ろ回し蹴りを叩き込んだ。まるで『バイオハザード』で、主人公がゾンビ犬にかましたような一撃。ハルの身体は軽々と吹っ飛び——先ほど『ミネが開けた穴』の横に一回りでかい穴をあけて、消えた。

数瞬の後、私の耳に何と言うか・・・あんまり想像したくないんだけど大体5～6メートル程の高さから、私より二回りほど重いくらいの何かが落つこちたような音と、『——ぐえッ!』という声が聞こえてきました。

そんな馬鹿の末路と助かった安堵とで溜息を一つ吐き、私は救い主の少女へお礼を言いました。・・・ありがとう、さふらん。お陰で助かりましたよ。

「どういたしまして、リツカ様。ご無事で何よりです」

私のお礼の言葉に、少女——さふらんは、その人形のように整った顔に微かな微笑みを浮かべて応えました。

森の奥深くに佇む湖のような、涼やかなアクアブルーの瞳と同色のロングヘアーが印象深いさふらんは『ノーム』という、大地の精霊がご先祖さんの種族。

先程私は彼女のことを『人形のよう』と評しましたがまさにその通り、彼女たちノームは《義体》と呼ばれる機械人形の体であるのが最大の特徴です。というのも、彼女らは実は本体が《アストラル体》と呼ばれる『実体を持たない精神生命体』なので、私の目の前にいる『さふらん』の身体は、あくまでも現界のために必要な《依代》でしかないのです。

ちなみに、現在でこそ《迷宮》から得られた《技術》によって機械の身体を依代とするノームですが、そんな技術なんてなかった大昔には人形を依代としていたそうで、そこから『生きた人形』などと呼ばれていたとか何とか。よくよく考えてみりゃ、結構な差別発言じゃね？

さふらんに助け起こしてもらいながら、ひん剥かれた寝間着を着直していると、

「朝っぱらから災難だったねえ、リツカちゃん」

という声が頭の上から降ってきた。『ん？』と、頭を上げたその途端、私の両肩に“ぽすっ”と、何かが落ちてくる。一瞬、“ぎよっ”となるもすぐに落ち着く。私の知り合いでこんな事するヤツは一人しかいない。

「リツカちゃん、おっはよー」

落っこちてきたのは、春の若葉を思わせる萌黄色もえぎいろのロングヘアーツインテールに結った、背中に蝶のような羽をもつ女の子。背丈はやたらと小さくて私のみぞおちの辺りまでしかない。しかもどんな身体構造をしているのか『肩車』の格好で乗っかられている私の両肩にはほとんど体重を感じられない。それらの要素が中性的な顔立ちと相まって、彼女をおとぎ話に出てくる妖精のような不可思議な存在に感じさせる。

・・・ていうか、妖精なんだけどね実際に。

彼女の名は、カノン。

長きに渡りヒトと神とを繋いできたと言われる、『フェアリー』という種族の女の子で、今まで出てきた面子の中でも特に突飛な経歴の持ち主でもある少女。

頭越しに身を乗り出してこちらを覗き込んでくるカノンに、私は挨拶を返しました。おはようございます、カノン。

「うんっ」

満面に無邪気な笑顔を浮かべるカノンにつられ、私も今までの騒動を忘れてつい顔をほころばせてしまう。だが、そんな微笑ましい朝の1ページも長くは続かない。壁に空いた『二つの穴』から外の様子を窺っていたさふらんが声をかけてきました。

「ところでリツカ様。アレ、止めた方がよろしいのでは？」

そう言って、さふらんが形のよい顎をしゃくった先には——地
上二階から落っこちてもなおピンピンして、お互いを罵倒し合いどつき合う馬鹿共の姿。

「アンタがやってきたせいで、お兄ちゃんとイチャコラできなくなっちゃたじゃん！ ちつとは空気読めつつーの、馬鹿トカゲー！」
「ふざける、ブラコン悪魔！ テメーこそいい加減、リツカから手え引けよ！ アイツはアタシのもんなんだぞー！」 「誰がアンタのモノか！ お兄ちゃんは今までもこれから、わたしの、わたしのだけのもんだあ——ッ——ッ！」

……まるで『リーサル・ウェポン』のラストシーンみたいに、

家の庭先で泥まみれになりながら殴り合うミネとハル。ご近所の目というものをまったく考慮していないその姿（しかも、ミネの方はスケスケのベビードール姿）に、私は両手で顔を覆いました。
・何やってんだよ恥ずかしい。

そんな彼女達にあきらめの溜息をつきながら、私はクローゼットの前に移動。制服と一緒にしまっておりある『とある道具』を二つ、引っ張り出しました。少し大きめのスプレー缶のような『ソレ』を見たカノンが、相変わらず私の両肩に乗っかりながら訊ねてきました。

「ねえねえ、リツカちゃん。ソレ、なあに？」

『スタンHG』^{ハンドグレネード}っていうヤツですよ。爆発と同時に強烈な轟音と閃光を撒き散らして、敵を怯ませる非殺傷型制圧兵器。ちなみに衝撃を与えることで起爆する着発信管式。

「ふーん、よくわかんないケド凄そうだね。それで、そんなモノ取り出してどうするのさ」

「・・・こうするんですよ。私は肩を竦めながら両手のスタンHGの安全ピンを抜き、眼下の馬鹿二匹に向けて投げつけました。」

*

欲しいものはそんなに多くはない——人生の加速。自分の一生を全力で駆け抜けている実感。

・・・それともう一つ。

心穏やかに迎える朝が欲しい。

第2話 あなたの瞳はまるで世界の縮図のような

・・・

・・・目が覚めるやベッドに潜んでいた義妹に押し倒されそこに乱入してきた幼馴染みが妹と『バトルランナー』も目じゃないほどのタイムン勝負をやらかし部屋が半壊。拳句にハイレベルながらも不毛極まるガチンコバトルの勝者であるところの幼馴染みに唇奪われ強姦されかけるといふ、およそ考えうる限り最悪としかいいようのないお目覚めによつて、朝も早よから私のテンションはダダ下がり。ああ、いますぐふて寝したい。

事の発端となったミイネ達は、騒動が一段落つてから姿を見せた私の母に「とりあえず、ミイネとハルは一風呂浴びて汚れを落とすな。それとアンタ達、朝メシはもう済ませたの？ まだならウチで食つておいき」と言われ、それぞれ浴室と食堂に足を運びました。なお、半壊状態に陥った私の部屋については、「そんなに気にしなくてもいいでしょ。どうせ今日から全寮制の学校に通うからしばらく家に帰って来ないんだし。それよりさっさと身支度を済ませな」と、「すっぱり」と言い切り、母はキッチンへ戻ってしまいました。・・・いいけどさ、べつに。

*

納得はできないものの、ぶーたれたところで仕方ないので朝の準備を整えるためまずは着替えることに。クローゼットから今日から

通う『クロスティーニ学園』の制服を取りだし袖を通す。

制服の基本デザインはハル達が着ていたものとほぼ同じ。トップスが白を基調にしたジャケット、ボトムは黒のスラックス。女子の場合はボトムは可愛らしいミニのプリーツスカート、ホワイトが基調で縁取りが黒。それらのセンターや袖にオレンジのラインが走っている。ポップな印象の外見とは裏腹にかなり頑丈な作りで、見えないところに様々な機能が付与されているのが大きな特徴。

はじめて袖を通した制服の着心地は上々でした。

少しだけ気分が晴れた私は洗面所へ移動。顔を洗い歯を磨く。隣には脱衣所があり、その奥が浴室。今はミネがシャワーを浴びていて、浴室に水が弾ける音が微かに聞こえてくる。そちらはできるだけ意識しないようにして身だしなみを整える。ちなみにハルはことは別の、私の両親が経営してるリストランテの従業員用シャワー室を使っています。別々の理由は件の二人が「コイツと一緒にシャワーなんか入りたくないし」などとおぬかしあそばしやがったから。ヒトの部屋でさんざか暴れまくって、どうしてコイツらはそんなワガママが言えるんだらうね。

（ま、たしかにあの二人が仲良く一緒に『キャツキャウフフ』とシヤワー浴びてるトコなんて想像もつかんけどさあ）

整髪剤を手に髪の毛のクセを整えていると、水音に紛れて甘いソプラノの歌声が流れてきました。おや、これは・・・声につられるように浴室の方に視線を向ける。知ってる曲だった。タイトルは――『Singing in the Rain』、いい趣味じゃん。

思わず口元が緩みました。曲の選択もさることながら、それ以上

に歌い手のレベルが高い。小さな頃から何をやらせても人並み以上にこなせるミネは当然というか歌も上手い。並のアイドルでは太刀打ち出来ないほどに綺麗な、クリスタルよりも透き通った声と、それによって紡がれる朗らかな歌が私のささくれだった気分を洗い流してくれるようでした。

・・・と、言いたいのだが、

（でも頭に浮かんだのが土砂降りの中のジーン・ケリーではなく、長鼻マスクをかぶったマルコム・マクドウェルなのはどういうわけなん？）

釈然としない気分で身繕いを続けるために視線を戻し——そして顔をしかめた。理由は私が見つめる鏡、そこに映る“そいつ”のせいだ。今まで見ないように努めていたのについ気が緩んでしまった。かすかに感じていたいい気分なんて、もう微塵も無くなっていた。

視線の先、鏡の中には腐った目をした少年が映っていた。

*

嫌悪をこらえて“それ”を見つめる。鏡の中の自分は親の仇でも見るかのような目で睨み返してきた。

背丈体格は中肉中背、自分としてはもうちょい“たっぱ”が欲しい。《異国》の出身である父譲りの黒髪黒目は、紅毛碧眼がほとん

どのヒューマンの中にあつては珍しい。やや童顔で“のんき”そんな感じの顔立ちやはり父の特徴を受け継いだもの。全体的なルックスは自分で言うのもなんだけど地味ながらもそんなに悪くはない、はず、だと思いたい。

でも、それらの特徴も、ある一点によつて全てが台無しだ——それがこの、病みきつた、死んだ魚のような瞳。私はこの目が大嫌い。だから鏡を見るのも好きじゃない。

（本当にいつ見ても、いやな・・・嫌な目だ・・・）

つくづく、そう思わざるをえない。

《黒》という色は様々な色をごっちゃ混ぜにして出来る色だという。だとするなら、さしずめ私の黒瞳はこの世のあらゆる汚濁を混ぜ込んで出来たそれだ。怒り、憎悪、怨恨、嫉妬——絶望。ヒトの持つ、あるったけの負の感情が渦巻いているかのようなこの目。

例えば『ハロウィン』のマイケル・マイヤーが『リング』の貞子を強姦して孕ませたとすりゃ、ひり出されたガキはこんな目をしてるんじゃないだろうか。鏡に写る自分を見る度に、私は心中で吐き捨ててきたものでした（それは私にとって、とことん不快な想像でもある）。

・・・次から次へとつまらない事を考えていたせいで、気が付けば結構な時間が経っていました。一度ネガティブに陥ると、際限なく後ろ向きになるのは私の悪い癖だ。

（なにやってんだかな・・・もういい。気分を切り換える、私）

頭を振って、鏡から目を外す。こんなことで時間を浪費するのにも限度がある。それに・・・これ以上この目を見ていたら、衝動的

に鏡を叩き割ってしまいそうだ。今までに何回もやってしまったように。ただでさえ両親には迷惑をかけっぱなしなんだから、こんなつまらない事で余計な心配かけさせたくない。

ゆっくりと息を吐き、私は前髪を垂らして目を隠すという、いわゆる『ギャルゲー』の主人公へア』に髪をセット。次いで鏡の脇に置いてある眼鏡をかける。デザインはかなり野暮ったくて、有り体に言えば大昔の漫画のガリ勉キャラがつけてるような『ぐるぐる眼鏡』そっくり。私の視力は両目共に1.5なので度は入っていない。

この眼鏡は私の《目》の事を慮った父が用意してくれた特注品。グラスに特殊な偏光処置が施されているので、この眼鏡をつければ外からはまず私の目は見えない。前髪で顔を覆っているならなおさらだ。《迷宮》由来の最新素材によって、見た目とは裏腹に羽のような軽さとバリステックグラスとして使用できるほどの頑丈さを兼ね備えている。

「・・・そんなのつけなくても、いいと思うんだけどな」

眼鏡の位置を調整していると、横あいから声がかけられた。ミネだ。どうやらシャワーを終えたらしい。

いやいや、そうもいかんのよ。なんせ、コレがないことには・・・私は声のした方、脱衣所へ首を回し——思わず『ぶっ!』と吹き出しました。

そこにはバスタオルを肩に引っ掛けただけという、あられもない姿のミネがいました。・・・あんだ、なんてカッコしてんのさ。はしたない。

「そんなこと言われてもね。お風呂上りの格好なんてこんなもんだし、それに髪を乾かさないことには着替えもできないんだから仕方ないでしょ。それよりドライヤー使いたいからそこどいてよ」

涼しい顔で反してくるミネ。んむ・・・言われてみりやその通りだ。そもそも私がいつまでも洗面所なんぞにいなけりやよかつただけの話なんだから、彼女に“はしたない”云々言うほうが筋違いだ。少し考えれば、いや考えなくてもわかりそうなものだけれど、彼女の裸を見たことで少なからず動転していたらしい。

赤面しつつ私が場所を譲るとミネは小さく「ありがと」とだけ言って鏡の前に立ち、壁にかけてあるドライヤーやヘアオイル等を手にとって丁寧に髪を乾かし始める。私もいつまでもここに居ても仕方ないので食堂に足を運ぶことに。なにより、妹とはいえ女の子の裸をジロジロ見続けるわけにもいかなかったこともあるし。

ミネに「先に食堂に行ってますね」と告げて踵を返したところで背中に「・・・ねえ、お兄ちゃん」と、声をかけられました。微かだけれど呆れたような響きが混じった声だった。振り向かずに応える。———なんですか。

「さつきも言ったけどさ、いい加減その眼鏡、外したら」

その言葉の意図を図りかね、私は無言で眉をひそめる。ミネも無言のまま髪の手入れを続ける。いやに耳障りなドライヤーの送風音をBGMに、私は口を開いた。

出来ない話だったの。ミネだって知っているでしょう、
“コイツ”がなけりや私は人付き合いさえままならないんだから。

繰り返しになるが、この目は眼つきが悪いとかいうもんじゃあない。見た者に嫌悪と不快感を与えずにはいられないゴミクズの眼なのだ。言い過ぎでは決してない。私にしてからが今の今まで鏡でこの目を見る度に、何度自ら抉ってしまおうとしたことか。それをしなかったのは我が身が惜しいとかいう“まっとうな”理由からではなく、やったところで回復魔法なり聖術なりですぐ治されてしまうから無駄だというだけにすぎない。それ以上に、家族に迷惑がかかるという“わきまえ”くらいは私にも備わっていたし。

他にも、今まで通っていた学校で「目が気にいらぬ」とかいう理由で何度か“あや”やインネンつけられたり、タチの悪い嫌がらせを受けたことがあった。

特に忘れられないのがまだ幼い頃に、母に連れられてここから少し離れた『ザバイオーネ』という場所にいる母方の祖父母を訪ねたときのこと。祖母は初対面の時に少しだけ眉をひそめはしたものの、結局は何も言わずに私に優しくしてくれたのですが祖父の方はそうはいかなかった。

つるつぱげの頭に蹄鉄ていてつみたいな形したヒゲという、なんだか手塚治虫の漫画に出てくるヒゲオヤジそっくりの祖父は、私と目が合うや、「ワシの孫がこんなに腐った目をしているはずがない！」なんぞと言い出す始末。数えて十にもならない子供相手にヒドくね？

しかもそれだけならまだしもあのジジイ、

『ええい、そこになおれ！ 貴様の腐った性根をワシが叩き直してくれるわッ！ —— 喰らえ、九字護身呪法ラリアートッ！』

・・・と叫んで、子供相手に殴りかかってきやがるし。マジ信じられん。

まあそれを見てキレた祖母が「アンタ、自分の孫になにやってん

だい！！」と、錯乱爺にナパームストレッチをブチ込んでくれたお陰で大した事にはならなかったのですが、叩き込まれた技の影響で祖父の胸元にはいまだに『緋文字』って小説のヒロインよろしく“A”の文字がくつきりと浮かび上がっているそう。ウチの祖母にやー、キン肉王家の血でも流れてんのかね。

しょうもない思い出のせいで話がズレましたが、とにかくこの目は不用意に晒すだけで厄介の種を芽吹かせる。それに新しい環境で新しい友人をつくるうにも、こんな目をしたヤツと友達になりたいなんて奇特なヒトはいないのだから、やっぱり隠しておくにこしたことはない。

「別にいいじゃん、無理してまで友達つくらなくってもさ」

そりゃあ、ミイネは昔から誰とでも仲良くなれるからいいかもだけれどさー、私みたくな友達少ないヤツにとっちゃ切実な話なんよ。

もてる者にはもたざる者の嘆きはわからんよな。より正確には『モテる者』『モテざる者』だけ。嘆息する私の背後でドライヤーの音が消えた。

「そうじゃなくて」すこし苛ついたような声。「わたし以外のヤツと、これ以上関わり合いにならないで」、そう言ってるんだよこの鈍感」

そこまで言われてやっとこ“ピン”ときた。ああ、要するにあんた、ヤキモチ妬いてんのか。茶化す私にミイネは、面白くもなさそうに「そうだよ」とだけ返しました・・・って、あれ？

随分と近くから聞こえてきたその声を怪訝に思い後ろを振り返れば、ミイネがすぐ後ろにまで近寄っていた。・・・この子、全然足音立ててなかったな。

驚きに一步下がろうとする私より早くミイネが動く。

流れるような動きで両腕を私の背に回し、自らも密着、“ぎゅつ”と抱きしめてくる。思わず身を固くする私の目をしっかりと見据え、ミイネは爪先をわずかに伸ばして軽く背伸び——唇を重ね合わせる。

目は二人とも開けたまま。見つめ合うようにしてくちづけを交わす。

“ぬらり”と、軟体動物じみた動きでミイネの舌が唇を割って入ってくる。

喉の奥まで犯し尽くすようだったハルのそれとは違い、私の弱点や泣き所のすべてを押さえたミイネとのキスは頭の芯まで侵すほどに甘い味がする。唇の柔らかさと口中で艶めかしく動く舌の感触が、重ね合わされた唇の間から漏れる水音が、痺れるほどの快感となって背筋を這い回る。

こうなってしまうともう抵抗する気なんて失せてしまう。ディアボロス相手に腕力勝負なんぞするだけ無駄というのもある。しかし結局のところ——

——結局のところ、どこまでいっても私はこの子を拒むことができない

観念した私は、ミイネとは比べるべくもない稚拙な動きで舌を絡ませ、キスを受け止める。ミイネはすこし驚いたような顔をしたけれど、それでもすぐに嬉しそうに目を細めた。ころなしに、舌の動きにも熱がこもったような気もする。

「・・・んう・・・ふあ・・・あ、う・・・」

切なげな声をあげながらも、ミネは“じつ”と私の目のみつめる。気がつけば、いつの間にやら眼鏡が外されていた。一体、いつの間に。地下鉄サムの弟子が何かなんか、ウチの妹は。

「ん・・・」唐突にミネが唇を離した。「はい、ここまで」

そう言つてミネは“あつさり”と私を開放しました。え、もうおしまい・・・？

気が乗つてきた矢先のことだけに、少なからずの期待はずれ感を抱く。そんな私の心中を見透かしたように、ミネは一步後ろに下がる。名残惜しさなんて微塵も感じさせないその態度に私は羞恥心を刺激されました。

（口では嫌とか言つておいて“コレ”だもんな・・・そりや、この子だつて引くわ）

なにか言つべきなのに何を言つていいのか判らない。気まずさを伴つた一瞬の沈黙の後、ミネが悪戯っぽく言いました。

「いきなり、ゴメンね」

・・・気にしないでいいよ。でも、なんだつて突然こんなコトを？
「別に、大したことじゃないの。ただ、ム力ついたから『上書き』をしただけ」

ミネは紅の瞳にやや悔しそうな色を浮かべました。ム力つく云々はともかく、上書き？ さっぱりわからん。私がなんぞやらしたか。

「お兄ちゃん、今朝わたしが“部屋から放り出された後”、ハルに何かされたでしょ」

心当たりがありすぎる。私は目を逸らしました。

「わたしが地面に叩きつけられて、ハルが同じ目に遭うまでの間が大体3・4分くらい。さすがにそんな短い間でエッチまではできないだろうけど、あいつのことだからキスくらいはされたんでしょう？」

うん、まあ。・・・その、ゴメン。

「お兄ちゃんのせいじゃないから謝らなくていいよ。で、やられっぱなしはムカつくから、せめてものお返しに『キスの上書き』したの。あのトカゲ女と間接キスなんてヤだから、お兄ちゃんが歯磨き終わるのを待ってね」

・・・へえ、それで少しは気が晴れましたか。

「うん。さっきのお兄ちゃんの顔とか見てたら、もう気にならなくなっただよ」

いまいちよくわからない理屈だったけど、それでミネの機嫌が治るならいいか。私はそう納得することにしました。それにしても、この子とハルって昔から犬猿の仲だったけど、今のセリフや行動を見るに根っこの部分では似たもの同士なのかもね。・・・指摘したらきつと怒り出すだろうから言わないけど。

「じゃあコレ、返すね」

そう言ってミネは私に眼鏡を返し、髪の手入れを再開するため鏡に向き直りました。その姿にはつい先程までの熱に浮かされたような雰囲気などどこにも見て取れず、彼女は私の事など忘れ去っ

たような表情と仕草で淡々とヘアケアを続ける。

そんな妹にため息をつき、私は眼鏡を付け直し洗面所を後にしました。

*

リツカの気配が洗面所から消えるのを感じたミネは小さく独りごちた。風の湖畔のように静かな面持ちで少女は微笑む。

「・・・あなたはその目も自分のことも大嫌いかもしれないけど、わたしはそんなお兄ちゃんが好きだよ」

彼女の声に沈黙だけが応えるが、別段どうでもいい。返事なんて端から期待していない。

「どうしようもなく汚いかもしれないけど、でもその中にほんのすこしだけ綺麗なものが混じってる。そんなあなたの瞳は——」

初めてその目を見たその時、どうしようもなく惹かれてしまった。あの日、あの時、自分はこの世界に独りきりではないと思うわせてくれた、いいひと——

「まるで——」

*

「そう、そんなリツカが大好き」

第2話 あなたの瞳はまるで世界の縮図のような（後書き）

いちゃラブってこういうの？ よくわかんないけど。

作品を通じて文章力等の向上に努めていきたいと思っておりますので、誤字・脱字等のご指摘、他にもご意見・ご要望などございましたら遠慮なくどうぞ。辛めの批評も大歓迎です。

第3話 塵気楼の少年

*

少し、ほんの少しばかり昔の話がしたい。

*

それは物心ついてからすぐ、まだミネが私の家族になる前のこと。

私はおかしな《夢》を見るようになった。

その夢の中で、私はどこか——暗い、ただひたすらに昏い、思い返すだけでも吐き気がするほどの血と狂気が充満する闇の中に閉じ込められていた。

当然というべきか、夢の中には私以外のヤツらも出てきた。『アナトミー』って映画に出てくる医者気取りのクソ野郎みたいな感じの連中だった。見てくれというより、人間性もしくは性根ともいうべき意味で——ついでに、やらかしてくれたことまで。

夢の中で私は『そいつら』に拘束され、そして何度も何度も、ある時は切り刻まれ、あるいは得体のしれない機械を埋めこまれ、あるいは妙な薬を投与され、あるいはヒト以外の生き物の血肉をかけ合わされ、およそヒトとしてのありとあらゆる尊厳を奪われ蹂躪され陵辱され続けた。

(・・・どちらかといえば『マシンヘッド』だったかもしれんな。バンドじゃない方)

今でこそ皮肉混じりに回想などしてられるが、当時の私にとってはいつそ殺してくれたほうがなんぼかマシなくらいの拷問である。なにせ連中ときたら、私が悲鳴を上げてても聞いちゃくれぬ。助けてと言っても駄目。もうやめたと泣き叫んでも無駄。さながら屠殺場でバラされる豚か鶏のごとく、私は目が覚めるまで身体を弄り回された。

結局、その日の悪夢から逃れることが出来たのは両親のお陰だった。

眠っている私の様子があまりにも異様にすぎたので、心配になった父が起こしてくれたのだ。それも心因性のショック症状を起こさないように、精神安定用の回復魔法をかけてからというのだから、げにありがたきは親の気配りである。

夢から覚めるや私は当然というべきか両親に泣きついた。涙と鼻汁、涎で顔を“くしゃくしゃ”にした上に失禁までするという、傍目には気でもふれたとしか映らない有様だった。一体何があったと尋ねる両親に、私は震えながら要領を得ない説明をした。

私から話を聞いた母は私の背を撫でつつ、ただの夢だから忘れてしまえと言ひ、そして父は——血の気が引いたような顔をしていた。今にして思えばその様は（喩えは悪いが）、かつて犯した自分の罪に縛られる咎人のようだった。

この口クでもない、正しくもって“悪夢のような”出来事にあえて“良かった探し”をするならば、所詮は夢の中の出来事だけに物理的な苦痛までは感じなかったというところか。さもなければ幼い私の脆弱な精神なんぞ『最初の一夜』で粉微塵になっていたろうから。

・・・そして最悪だったのは、それが『たった一夜の悪夢』では

済まなかったということだった。

母は言ったものである。「どんなに怖くても、ただの夢なんだから気にすることはない」と。

確かにただの夢だ。それがどれほど恐ろしかろうが、現実の自分には掠り傷一つ付けられるわけではないのだ。ないのだ、が、

その悪夢が、もう二度と見たくないような地獄の体験が、そこそ眠りに着く度に日毎夜毎に己を苛むとしたら。はたしてそんな境遇に、それも三つや四つの幼子が耐えられるものだろうか。

結論からすれば、私が『エルム街の悪夢』のヒロインよろしく発狂寸前まで追い詰められるのに、さほど長い時間はかからなかった。その夜でさえ私は何度も悲鳴を上げて目覚める羽目になったのだから。

さらにはあのロクでもない夢見のせいか、はたまた元々の性根が顕れたものか、朝になって洗面所の鏡で自分の顔を見たとき、そこに映っていたのは腐りきった眼をした餓鬼だという始末。私は思わず鏡を叩き割った。

日に日に憔悴^{せうすい}していく私を救うべく、両親は思いつく限りの手段を講じた。ありとあらゆる伝手を辿り、高名な精神系魔法の使い手や聖術士の元を訪れ、あるったけの魔法薬を用い——その全てが無駄に終わり、緩慢に死にゆく私を見守ることしかできないと思い知ったその時、両親は一体何を思っただろうか。

かくして、もはや数えるのも億劫になるほどに見せつけられ、そのくせ見飽きることさえできない悪夢に魘^{うな}された何度目かの夜のこと。とうとう気力も体力も限界に達した私は両親に弱音を吐いた。それも最低としか言い様のないヤツを。

『、』

それは決して口にしてはいけない一言だった。たとえどれほど苦しくても、それは、それだけは、齒を食いしばってでも言うてはいけなかったのに。

だというのに、幼い私は自分の弱さを言い訳にして毒の一言を吐いた。母は泣きながら「ごめんね」と繰り返し、父は何も言わず母と一緒に私を抱き締めてくれた。背にまわされた両腕は泣けてくるほどに震えていて、その温もりを思い起こす度に当時の自分を殴り殺したくなる。

間違いなく、私にはクズの血が紛れ込んでいる。それは今にいたってなお、私の心に突き刺さった刺のようなものだ。

.....

そうまで私を追い詰めたのが夢ならば、救ってくれたのも夢というのは中々に気の利いた皮肉ではあった。

幼心に何もかもを諦め、死ぬべき運命に観念したその夜のこと。私はもう一つの夢を見た。

——それは一人の少年の冒険譚。
ぼうけんたん

その《夢》に出てきた少年は、とある《學園》にやってきた《転校生》。しかしてその正体は《學園》の地下に存在する遺跡に封じられた《秘宝》を求める《宝探し屋》トレジャーハンター。昼は一学生として生活しながらも、夜ともなれば《秘宝》を求めて地下の遺跡に挑んでいた。

少年の行く手を阻むのは数多の罾とモンスター、そして——遺跡の呪縛に囚われ、ヒトならざる《力》を持った魔人達。

常人ならば、いや、たとえどれほどの《力》を有していても絶対に敵わない怪物達を相手取りながらも、少年は臆す事なく突き進む。その身になにか凄い《力》がある訳じゃない。ましてや選ばれた特別な存在というわけでもない。

なんの《力》も持たない身でありながら、次々とヒトならざる《力》を持った魔人たちを退け、あまつさえ彼らの魂さえ救つてのけるその姿。

ヒトの持つ知恵と勇気だけを武器にして、ただ“がむしゃら”に《秘宝^{しんじつ}》を求めて戦い続けた彼の姿は、救いようのない闇をさまよう私にとってまさしく一条の光明だった。

そんな彼の冒険と活躍に、私は夢中になり（夢の中で“夢中”とはこれに）——

——目が覚めたら朝になっていた。

傍らでは両親が心配そうな、それでいて“ほっ”としたような顔をしていた。それを見て私は気がついた。私はあの悪夢を見るようになってからはじめての、安らかな眠りに就くことができたのだ。

今までとはあまりにも違いすぎる私の様子に安堵しつつ、それでも不安が残る両親は何があったのかを訊いてきた。

私は、さっきまで見ていた《夢》の内容を両親に説明した。少なからず興奮していたせいで我ながら要領を得ないものだったが、それでも最後まで聞いてくれた母は「そりゃあ良い夢だったね」と、泣き笑いのような顔で私の顔を撫でてくれた。「その男の子には感

謝しないよね」とも。

対する父は少し複雑そうな顔をしていたように思う。そりゃあそ
うだろうな。必死になって助けようとした息子が、自分とは関係な
いことで勝手に助かったんだから。素直に喜ぼうにも、割り切れな
い気持ちだつてあるか・・・両親には本当に悪いことをしたと思う。
当時は気付かなかったが、よく思い出せば私がけつたいな夢をみる
ようになってからこつち、この二人も満足に眠ることが出来てな
かったのだ。

それから後にも、私は何度もあの少年の《夢》を見た。気が付け
ば、私はいつしか彼の出てくる《夢》を心待ちにしてさえいた。も
ちろん例の悪夢だつて見るけれど、あの少年の姿に勇気を分けても
らった私にとつて、そんなのはこれっぽっちも怖くなかった。彼に
はどれほどの感謝をしても足りないくらいだ。自分の夢の中の、い
わば有りもしない蜃気楼のような物に対してそれはないだろうと思
われるかも知れないが、これは私にとつて偽らざる本心だ。

・・・・・・

それから今に至るまで、こと自分に関しては語ることなんぞはな
い。精々が悪夢に囚われたあの日を境に、私の人生は大きく変化し
たというくらいだ。

私は自分を救ってくれた、夢の中の少年のようになりたいと思う
ようになった。

行く手になにが立ちはだかろうとも決して怯まぬ強さでもつて、
絶望の夜に囚われていた私に銀色の暁を見せてくれた彼のような強
さが欲しいと。

彼は自分の事を《宝探し屋》、すなわち『冒険者』だと名乗って

いた。

ならば、私も同じ道を志したなら、彼のようになれるのではないだろうか。

そしていつか、私もどこかのだれかのそのために力を尽くすことが出来るようになるだろうか。

もし、もし、そうなれたなら——そのとき私ははじめて、いまだ自分に絡みつく過去の落とし前をつけられるのではないだろうか。

私が冒険者を目指すきっかけとは、要約すればそんなところである。

*

ミネとのおかしな、あるいは“いびつ”なやりとりの後、半ば逃げ出すようにして洗面所から出た私は朝食をとるべく家の食堂——ではなく、両親が経営するリストランテに向かいました。

お店の名は——『カオルーン』。

父の故郷の言葉で『九匹の龍』を意味する名前の、このリストランテはここいらではかなり有名だ。

オーナー兼メインシェフである父が作る料理はとにかく評判が良く、その腕に惚れ込んだ常連さんの中にはわざわざ遠方の、例えばこの大陸の端っこにある『ストウルデ』や『ポレンタ』からやってくるヒトもいるんだそう。

そしてもう一つ有名なのが従業員、とりわけフロアの顔ともいう

べきカメリエーレさん達のレベルの高さ。・・・ただし、ちよいと残念な方向への。

というのも、『カオルーン』のカメリエーレは「老眼鏡紳士萌え！」という母の趣味（ワガママともいう）によって『老眼鏡の紳士』によって占められており、これが同好の士ともいうべき方々の琴線に触れたかして、今では従業員目当てのお客様も押しかけてくる始末。

そんなヘンテコながらも愛すべきお店に足を運ぶ理由は招かれざる客人たちのせい。用意した分だけじゃご飯の量が間に合わなかったので、お店の『まかない』で済ませることになったから。キッチン椅子やテーブルも足りなかったし。まあ、店舗自体は中庭を挟んで家と繋がっているわけなので、実際は家で食べるのと大して変わらないのですが。

家の裏側にある勝手口を抜け、ハーブガーデンも兼ねた中庭を通って店舗に向かう。

このハーブガーデンは主にお店の料理に使うために造られたもので、父の多彩な趣味の一つ。料理用だけにタイムやセージ、バジル、セイボリーといった種類が目立つ。ルー（ヘンルーダ）やヒソップ種、ワイルド・ベリーといった薬用ハーブもささやかながら植えられている。私やミネもちっちゃん頃にはお世話になったものです。また、庭の真ん中には、私が父と一緒に製作したテーブルやスツールが置かれていて、お店が休みの日には家族みんなでこの中庭でご飯を食べるのがうちのちょっとした習慣。今度この庭でご飯を食べられるとしたら、それはいつになるんだろう。

生垣として植えられたラベンダーに沿ってお店側の勝手口に到着ほのかに漂う、フローラルでどこか荒削りな甘さのラベンダーの香りに鼻をくすぐられながら扉を開く。

そういえば数多くあるハーブの中でも父が思い入れを込めて栽培しているのがこのラベンダー。このガーデン以外にも、店の軒先や家の花壇には定番のソーヤーズやヒッドコートをはじめ、ムンステッドやジーン・デイビスなど様々な種類が植えられている。

随分と前に、『そんなにラベンダーが好きなの?』と思い入れの理由を尋ねたところ、父は「昔の友達が大好きだった」と、なにかを懐かしむように――そして少し寂しげに――答えてくれたものでした。

家や両親にまつわる様々な事柄を思い出しながら厨房に入る。ここでは一組の男女が朝の仕込みをしていた。

種族はどちらもヒューマン。女性の方はニンジンのような色合いの赤毛にやや緑がかった碧眼。頬のあたりに“そばかす”のあとという、なんだかモンゴメリの小説か竹本泉の漫画のヒロインみたいな顔立ち。とりたてて美人というわけではないけれど、“きびきび”とした所作や立ち居振る舞いが氣立てのよさを感じさせる。調理中だけに、左の耳に着けられた大きめのピアス以外には化粧つ気がまったくない。

そしてもう一人。男性の方は私と同じく黒髪黒目。穏やかで人懐っこそうな表情と、世慣れない少年のような面影を残す童顔のせいでもう、どうにも年齢が判りづらい。『男たちの挽歌』に出てた頃のレスリー・チャンと『となりのトトロ』の主人公姉妹の父親（名前は忘れた）を足して二で割ったみたいといえば分りやすいだろうか。彼も左の耳にピアスを着けていて、それは女性の着けているものとお揃いのデザインであるのが判る。

この二人が傍目にも仲良く仕込みの作業をする姿は見ているだけで微笑ましい。胸に感じた暖かな気持ちに口元を緩ませながら、私

は二人に挨拶をしました。

——おはよう、父さん、母さん。

*

私の挨拶に父はこちらを“ちら”と一瞥。口の端をわずかに上げることで返事を済ませ、作業を再開しました。母はそんな父に苦笑めいた表情を向け、一旦作業の手を止めて「やっと来たね。随分と遅かったじゃないか」とこちらに寄ってくる。

ええ、まあ。遅くなつてすみません。ばつの悪そうな私に、母は“ニヤリ”といたずら小僧のような笑いを浮かべました。

「その様子じゃ、ミネに搾り取られてたつてトコか。朝っぱらから大変だねえ“お兄ちゃん”は」

・・・『きのうはおたのしみでしたね』みたいな顔はやめていただけませんか。大体、えつちな事とかはしてないんだから——
「でもキスくらいはしてたんだろ？」

凶星を突いた一言に思わず『ぐう』と呻いてしまふ。それがそんなに可笑しかったのか、“くすくす”と笑う母。歳の割に子供っぽい仕草ですが、彼女は背がそんなに高くないのと“くりっ”とした瞳のせいかわつと見、私やミネの姉くらいにしか見えないから違和感はありません。

「仲が良いのはイイ事だけど、何事も程々にね。若い身空でまた“腎虚じんきょを患う”なんてイヤだろ？」

まあ、それは確かに。

『覚えてた』ってのはホントに怖い。“あんどき”はホント顔から火が出るなんてモンじゃないほどの恥爆弾を抱えるハメになったもんなあ……。

思い出すのもイヤな記憶に顔をしかめる私に笑いをこらえつつ、母は「まあいいさね。それよりこれ、フロアに持って行きな」そう言つて、料理の入った大鍋や皿の載ったギャルソンワゴンを私の前に押し出してきました。

ワゴンの上にはリボリータ（パン入りのミネストローネ）やパツパ・コル・ポモドーロ（トマトソースで味付けしたパン粥）の入った大鍋、トスカーナパン。他にもピンツイモーニオ（サラダ系の前菜）といったこの地方の郷土料理が盛りつけられた大皿が並べられていました。

さすがにプロが作ったものだけに、見た目も匂いも素晴らしく味だつて保証済み……。なのだけれど、朝食食べるにはちよつと重すぎやせんかな？ トリツパ（牛の胃袋）の煮込みとかまであるし、それに量だつて半端ないし……。

「なに言つてんだい、コレでもまだ足りないくらいさ。今日からアంతらが通うクロスティーニ学園つてのは、色んな意味で“普通じゃない”学校なんだ。ちゃんと食べてしっかり力をつけておかないと、入学初日でブツ潰れちまうよ」

そんなもんすか。

「そうさ。わかったらホラ、さつさと向こうで待つてる欠食児童どもに持つて行つておやり」

へえーい。

「返事は『ハイ』だろ。それと、プライベートとはいえ店の中なんだ、配膳はキチツと丁寧にやるんだよ」

ハイハイ。母のプロ意識に溢れるセリフへ適当な返事をよこして、私はワゴンと共に厨房を後にしました。

*

「お兄ちゃん、おかわりよそってあげるからお皿出して」 ありがとう、ミイ・・・ 「おいリツカ、そいつが盛ったメシなんか食ったら腹こわずぜ。アタシがよそってやるからこっちに皿よこしな」 「ちよつとハル、それってどういう意味よ！」 「うるせーな。メシの時くらい黙れつての」 「あんたこそ、人ん家の食卓なんだから遠慮なさいよ！」 「リツカちゃん、そっちのパン取ってー」（やっぱり自分でよそうことにしよう・・・） 「なありツカちゃん、パン取ってよー」 「カノン、よろしければ私のをどうぞ」 「イイの？ ありがとー、さふらん」 「あんた達も少しは遠慮なさいよ！」

自分で盛ったりボリータのお皿にスプーンを突っ込み、私は目の前に広がる“かましい”光景に溜め息をつきました。

用意されたご飯の量はかなりのものになりましたが、育ち盛りの食欲にはそれでも足りないほどだったらしい。身繕いを済ませたミイネも交え、少女達は貸し切り状態なのをいいことにフロアが一番良い席に陣取り、旺盛な食欲でもって次から次へと料理を平らげていく。

「ねえリツカちゃん、そのドレッシング取ってー」 —— ほい、

どうぞ。 「ありがとー」 どういたしまして。 「カノン、ドレッシングを使い過ぎですよ。 余分な油を摂らないようにしないと――」 「わかってるよー、そんならい」 「本当ですか？ あとで体重計の上で泣く羽目になっても知りませんよ」 「だから大丈夫だって。 こう見えてもカロリー計算くらいはできてるよー。 さふらは心配性だねえ」

私の右隣の席でリスみたいに食べ物で頬っぺたを膨らませるカノンを、さふらがまるで姉か母親のように世話を焼いている。 相変わらず仲の良いことだ。 それに比べて……。 私はテーブルの向かい側で、殺伐とした雰囲気垂れ流すミネとハルに目を向けました。

「なあミネ、そのアクアパツアよそつてよ」 「ざけんな、それくらい自分でやれ」 「ケチくせエな。 これだからディアボロスってヤツは・・・」 「種族関係ないし。 アンタなんか食べさせるご飯なんてないって言ってるのよ」 「・・・ハル、どうぞ。 大盛りでいいですね。 お兄ちゃん、コイツにそんなことしなくても――」 「お、サンキュ。 やっぱリツカは気が利くな。 さすがアタシの嫁だ」 「ちよつと、誰があんたの嫁よッ！」 「ああ、悪い。 嫁じゃなくて婿だった」

わざとらしく言い直すハルにくつてかかろうとするミネを宥めながら、私は溜息をつきました。 どうしてコイツらは食事時くらいは大人しくしていられんのかな。 せつかく美味しいご飯を食べているんだから、 “和気あいあい” とまでいかずとも和やかな空気を作るくらいしてもよからうて。

「まったくいつもこいつも “わきまえ” ってモンを知らないんだから。 ここはわたしとお兄ちゃんの愛の巣なのに・・・」

不穏な表情で爪を“ギリギリ”と噛むミネに少なからずビビっている、背後から「なに言ってるんだい、あたしとダーリンの愛の巣だよ」という声かけられる。

振り返ればそこに、どうやら仕込みを終えたらしい両親が食後のコーヒーの為に用意されたポットやカップが並べられたワゴンの横で片や苦笑、片や失笑を浮かべていました。

その姿を認めたミネ達が二人に挨拶をする。

「おはよう。パパ、ママ」「えつと、おはようございます」「おじさま、おばさま、おはようございまーす」「お早うございませう」

普段の、それこそ傍若無人という言葉が形になったような彼女達からは想像もつかない“しおらしい”姿だが、この一見、どこにでもいそうな若夫婦（どちらも三十路越えてるが）といった風情の二人の前では、コイツらどころかどんな荒くれも借りてきた猫のように大人しくなる。

それにしても・・・ダーリン、ねえ。

呆れながら両親の左耳に着けられた、お揃いのピアスに目をやる。これは結婚指輪の延長のような物だ。指輪だと料理の度にいちいち外さなきゃいけないからイヤだという理由で、若い頃の母がねだった物なんだとか。たぶん、二人が想い合う気持ちの量は、これを初めて着けた頃から少しも目減りしてないんだろ。結婚してからももう十年以上経って、しかも思春期の子供までいる歳だっつーに、いつまで新婚気分にいるつもりだか。

「わかってないねえ。そんなんだからアンタはオコチャマなのさ」

皮肉げな態度をとる私のオデコをデコピンで『ぺちり』と弾き、母はミイネの隣、父も私の左隣の席に腰掛けました。

「好きっていう気持ちはいつになっても、いつまで経っても変わらないんだよ。ましてや、あたしはダーリンの事を一生愛せるヒトだっと思ってんだ。いつまで経とうが熱々のラブラブでいるのが当たり前さね。当たり前だからこそ、それは恥ずかしい事でもなんでもないのさ」

ラブラブときた。朝っぱらから臆面なしのノロケとは恐れ入る。

「あたしが惚れたのは堂々と惚気けることも出来ないようなロクデナシじゃないのさ。——そうだろ、ダーリン」

そう言つて母は向かいの席へウィンクを投げかけ、それを受けた父が実に洒脱な仕草で肩をすくめる。息のあつたやりとりだ。毒気を抜かれる私とは対照的に、周りの面子は憧憬と羨望が混じったような顔をしていた。それを満足気に見渡してから、母はテーブルに肘を付き、組んだ両手の上に形のよい顎をのせた。顔つきと雰囲気を変えて私の目を“じつ”と見据える。

「さて、こうやってみんなで食事するのも今日からしばらくは出来なくなると思うと名残惜しいが、いつまでもこうしてる訳にもいかない。さっさと本題に入ろうかね。

リツカ、あんた本当にクロスティー二学園に入学して——冒険者になるつもりなのかい」

何を今更言いますかね。私はわざとらしい態度で片眉を上げました。

冒険者育成学校『クロスティー二学園』。

設立は今から200年ほど前に遡り、以来、最先端の教育理論と設備に裏打ちされた高度なカリキュラムによって、数多くの優秀な冒険者達を世に送り出してきた、この大陸——より正確には私らの住んでいる大陸中央部以西——における冒険者育成の名門。

他所ではどうなのかは知りませんが、私らが住んでいる地方では大体が数えて15になった者が成人として扱われ、後々の進路もその時点で大まかに決定される。

で、去年晴れて成人を迎えた私の進路こそが、他ならぬこのクロスティー二学園への進学でした。

大陸において冒険者という職業自体はさほど珍しいものではない。実際、私の同級生も三分の一くらいがクロスティー二学園への進学を決めていたし、そもそも私の両親にしてからが若い頃は冒険者をやっていたくらい。しかし私のように、実家何がしかの商いをしている者は親の家業を継ぐというのが一般的で、例えば継ぐためには専門の知識が必要といった場合を除けば、進学を選ぶ者というのは滅多にいないというのもまた事実だった。

「だっていうのに、なんで冒険者になろうとするのかね。そのために今まで鍛えてきたのは知ってるし、親の欲目を抜きにしてもあんなならかなり“いいところ”まで行けるとは思うさ。それでも、正直ミイネはともかくあんたに向いてる稼業とは思えないんだよね」

んー・・・まあ、母さんの言ってることも尤もだとは思いますがどね。なんぼモンスター相手でも、誰ぞを殴ったり蹴ったりとかちゅうのは性に合わないし。

「よく判ってんじゃないか。ついでに言うなら、世間で言われてるほど稼げるわけでもなきゃ楽な商売でもない・・・まあ、こいつは

どんな事にだって言える事だけだね。考えなおすなら今の内さ」

いつになく真剣な母の視線に息苦しさを覚えた私は一旦言葉を切り、コップに注がれたオレンジジュースを呷りました。気分を落ち着けゆっくりと深く息を吐き、母に向き直る。

これから話すことは私にとってとても大事なことだ。一言一句を噛み締めるようにして口を開く。

・・・それでもね、昔からの《夢》だったんですよ。冒険者になるのは。

私が冒険者を目指すのは、なにもあの《夢》の少年に対しての憧れだけというわけではない。いくら《彼》の存在が大きいとはいえ、それだけで文字通りの『斬った張った』の世界に飛び込むほど私はオツムが壊れきっているわけじゃないし。

ちよいと話が逸れるが、私が好きな映画のひとつに『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』というものがある。

ジョージ・A・ロメロによる、現代におけるゾンビ映画の原点とも呼ばれる古典ホラー。一般的にはただのB級ホラーと捉えられがちではあるが、見方によって様々な側面を見せてくれる傑作映画。これを初めて観たとき、つくづく思ったものだ——この物語の登場人物達のようににはなりたくない、と。

話の中に登場するモンスター、《生きた死者》^{リビングデッド}。それはすなわち、この世界にごまんという『死んだように生きている』有象無象に対しての痛烈な皮肉であり、作中の人物たちが織りなす行動は、世に溢れる『自分さえよければそれでいい』という身勝手なエゴを振りかざす人々の戯画でもある（ラストに出てくるマンハント気取りのアホとかは特にね）。

本当に、こんな風にだけはなりたくはない。

ただ生きているだけで人生になんの展望も見い出せず、その日その日をダラダラと消費するだけのそんな生き方、死んでいるのとの違いがある。

自分の事を気にかけてくれるヒト達に何も返すことさえしないで、ただその優しさを貪るだけの生き方に、何の意味がある。

（そんな人生ダラダラ続けるくらいなら、いつそ――）

ましてやヒューマンの寿命なんて、どれだけ頑張つて長生きしても精々60年ぼっち。そんな命と我が身を惜しさに何も出来ず、ただ『ああしておけばよかった』『こうすればよかった』という後悔のみを積み重ねて一生を終える――そんな人生に一体どれだけの価値があるというのか。

そう、ただ『生きているだけ』ではイヤなのだ。自分が生きているという実感さえなく、命を磨り潰すなんて耐えられない。

たとえどれほど短くともいいから、自分のすべてを使い尽くして何かを成さないことには死んでも死にきれない。

それがなんだって構わない。なにかを、こんな自分でも何かができるという証を立てたい。そして叶うのならば私も、大事な人達のために、どこかのだれかのそのために全力を尽くせるような生き方をしてみたい――かつて私を助けてくれた、夢の中の男の子のよう。

（なによりも、本来なら一度は死んでいた私だ。拾った命に未練なんぞ持つてどうする）

欲しいものはそんなに多くはない——人生の加速。自分の一生を全力で駆け抜けている実感。

ただそれだけがあれば、他に何もいらない。

.....

一気呵成に己の心情を吐き出し、私は睨みつけるようにして母と目を合わせる。言いたいことはすべて言わせてもらった。これで駄目だとか云われたところで、私は一歩だって退く気はない。・・・ってゆーか、この日のために今まで体鍛えたり、渋る父に頼んで（具体的には土下座&泣き落とし）冒険者に必要なあれこれを教えてもらったたりしたつーに、今さらそれを“ふい”にされてたまるかつちゅうんじゃ。

こちらを見返す母の目は風の海のように静かではあったけど、一瞬でも気を抜けばあっという間に引きこまれてしまいそうな眼光を湛えていた。

まるで『デスペラード』の、冒頭の酒場のシーンでマリアッチと目が合ったブシェミのような気分。眼を背けたいのを必死に堪えていると、母はほんの少しだけ口元をゆるめ「成程、ね」と呟きました。

「まあ、合格つてところか。これがもし『自分なら大丈夫』だの『死ぬ覚悟はできている』みたくなクソ台詞を吐こうモンなら、足腰立たなくなるまでどつき倒してからとっておきのサッシカイアで鼻うがいさせてやるところだったんだけど・・・」

・・・どうやら知らないうちに人生二番目のピンチを迎えていた

らしい。顔を青ざめさせる私のことなど知らぬげに母が続ける。

「でも、そこまで腹を括ってんなら話は別さ。どこまで行けるか知れないけど、やれるだけやってみな。それで、ミネは・・・」

「あ、わたしの事なら訊くだけ無駄だよ。反対なんかされたらその時は、家出してお兄ちゃんについてくもん」

トスカーナパンを齧りながら言い切るミネに母は「わかってるよ」と肩をすくめてみせました。

「ま、そうだろうね。あんたならそう言うと思ってたよ。まったくあんたといいハル達といい、選べる相手にや事欠かないだろうに、よりにもよってなんでリツカなのかねえ。」

『だめんずうおーかー』って漫画を見たことないのかい、男を見る眼のない女は苦勞するんだよ?」

自分の腹を痛めて産んだ息子に対してヒデエ言いようである。ここまでくると、いつそ清々しい気分になせられるね。

「ふん。悔しけりゃクロスティーニ学園で男を上げて、コイツらに相応しい男になるんだね。口先程度にもこの娘らを大事に思ってるなら、それくらいは余裕だろ。なにより、ミネ達だっていつまでもあんたなんかを待ってちゃくれないんだ。精々、気張んな」

言われんでも、そのつもりですよ。

母に頷きだけを返してリボリータを口に運ぶ。具沢山のミネストローネに硬くなった余り物のパンを入れて煮直し、チーズで仕上げたこの煮込み料理は私の大好物。インゲン豆やジャガイモ、キャベツをはじめとした各種野菜と濃厚なチーズの旨みが重なり、とにかくたまらない美味しさ。

本来なら季節はずれの料理をわざわざ作ってくれたのは、きっと母なりの気遣いと応援なんだろうな。そう思えば味わいも感慨も“ひとしお”だ。

（でも、この味ともしばらくはお別れかぁ・・・）

柄に合わず“しんみり”した気分でリボリータをぱくついていると、母が「・・・なありツカ、ミィネ」と声をかけてきました。んあー、なんですかのん？

スプーンを口に咥えたまま首を傾げる私に、母はしばらくの間ためらうような表情をしましたが、やがて意を決したように口を開きました。

「・・・親ってヤツはさ、ただ“子どもを産んだ”だけじゃなれないもんなんだ」

そう切り出す母とそれを見守る父はとても辛そうでした。食事の手を休め、黙って耳を傾ける。

「子供が生まれた後、その子に何をしてやれたか——大事にするなんざ当たり前で、時には厳しくなりながら、言葉だけでなく自分の行動すべてで子供を育てて、はじめてそいつは『親』を名乗れるんだ。でも・・・」

まるで罪を告解する咎人のような面持ちの両親。私とミィネは無言。

「でも・・・あたしらは、あんた達が一番辛い時になーんにもしてやれなかった・・・」

“ぎり”という音。

目を向けるとそこに、険しい顔で歯を食いしばる父。その腕がすかに揺れている。きつと、テーブルの下に置かれた手は固く握りしめられているのだろう。

「こんなあたしらは・・・ちゃんと、あんた達の『親』でいられたかい？」

私とミネはどちらともなく顔を見合わせ——頷き合う。

そんなこと、聞かれるまでもない。私の、私達の『親』は後にも先にも彼らしかいないし、なにより『お父さん、お母さん』と呼びたいと思うのもこの人達だけだ。この二人以外の誰にだって、私たちの両親なんて絶対務まりやしない。

だから私達は思うところを正直に伝えました。なにより、私達の両親でいてくれたことへの感謝を。

それらを聞いた母は一瞬、呆気にとられたようでした。その後、泣き笑いのような複雑な表情のまま顔を伏せ、

「・・・そっか。ありがとう」

と、呟くように言いました。

父は、『言いたいことは母が全部言った』とばかりに何も言いませんでしたが、代わりにとても優しい目で私達に頷き——無言のエールをよこしました。

——あなた達の子供で良かった。

そう言おうとして、やめる。

セリフが陳腐すぎて、いつそ笑えてくる。なにより、思いの丈を口にするべきはもう終わった。これから後は、言葉で現した思いを行動で示すのみ。だから口には出しては何も言わず、目の前の料理を忘れないように味わうことだけに専念する。

もうしばらくの間は食べられないであろう我が家の料理は、今までで最高の味がした。

第3話 厩気楼の少年（後書き）

『九龍』やったことのある方なら、この話で主人公ちゃんの正体について“ピン”ときたかも。

次回からやっと学園生活（の第一歩）が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307u/>

剣と魔法と《學園》モノ。

2011年9月13日22時42分発行